

Arthuriana Japonica: Newsletter No. 26

December 2013

国際アーサー王学会日本支部会報

Société Internationale Arthurienne Section Japonaise

目次

I. 2012 年度年次大会報告	1
年次大会プログラム	1
総会議事録	1
大会発表要旨	3
特別講演要旨	4
II. 2013 年度年次大会のお知らせ	5
III. 会計からのお願い	5
IV. 会員名簿に関するお願い	5
V. 研究発表・シンポジウム企画募集	5
VI. 文献情報	6
英文学	6
独文学	7
仏文学	8

I. 2012 年度年次大会報告

日本支部の 2012 年度年次大会は、下記の通り滞りなく開催されました。ご参加いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

[日時] 2012 年 12 月 15 日 (土) 午後 1 時 15 分より

[場所] 中央大学多摩キャンパス 2 号館 4 階研究所会議室 4

[大会費] 1,000 円 (学生無料)

[懇親会費] 5,000 円 (学生 3,000 円)

年次大会プログラム

*開会(13:15)

*開会の辞 支部長 細川哲士(立教大学名誉教授)

*第1部 研究発表(13:30-15:15)

司会: 渡邊徳明(日本大学)、嶋崎陽一(龍谷大学)

「消極的な求婚者—アイスランドの bridal-quest romance から—」林邦彦(尚美学園大学非常勤講師)

「ミネザングにおけるアーサー王物語—ハルト

マンとヴォルフラムのミネザングの比較を中心に—」伊藤亮平(松山大学非常勤講師)

「白鹿、ハイタカ、角笛—クレチアン・ド・トロワ『エレクトとエニード』における狩猟の言説—」小沼義雄(埼玉県立大学非常勤講師)

*第2部 特別講演(15:30-16:15)

司会: 不破有理(慶應義塾大学)

「宮沢賢治と中世フランス文学—虚構の問題—」

天澤退二郎(明治学院大学名誉教授)

*支部総会(16:30-17:20)

(議長) 細川哲士

*懇親会(17:30より)

(場所: ヒルトップ食堂 2F フラット)

2012 年度大会も、会員・非会員の皆さまに多数ご参加・ご協力により、無事に開催することができました。物心両面に渡るあたたかい応援を下さったみなさまには、心より御礼申し上げます。特に今大会は前年度と同様、中央大学人文科学研究所との共催ということで、力強いサポートをいただきました。同大学の渡邊浩司先生には篤く御礼を申し上げます。また受付業務も、中央大学の学生さんにご協力いただきましたことをここに記し、感謝の意を表します。懇親会も、盛会のうちに終了することができました。ご参加・ご協力いただいた皆さま、ありがとうございました。(事務局)

総会議事録

*報告事項

(1) 2012 年度の活動について

Bibliographical Bulletin の発行が遅れたことによる送付遅延について報告があった。

(2) ブカレスト大会の案内

2014 年 7 月 20-27 日にルーマニアのブカレストで第 24 回国際大会が開催される旨、報告があった。これに伴って研究発表などの応募呼びかけが行われた。

(3) 書誌担当からのお願いと報告

Bulletin とニューズレターに掲載される書誌の編集方針の違いについてあらためて説明があった。前者はアーサー王伝説もしくは中世文学に関連する会員業績に限り、後者は会員のその他業績および広くアーサー王伝説関連の出版物を掲載する。

また Bulletin に掲載される梗概の長さは上限が 50 語である旨、寄稿者に注意を呼びかけた。また掲載にあたっては、できるかぎり執筆者本人から書誌担当者に献本や抜き刷り送付をお願いしたい旨が強調された。

(6) 退会者・退会希望者報告

ご逝去による退会：福井千春氏、清水阿や氏

退会希望者：篠田知和基氏、福島治氏

* 協議事項

(1) 2012 年度決算報告

会計担当幹事の渡邊徳明氏より 2012 年度の会計収支決算報告が報告され会員の承認を受けた。なお、前年度までの予決算報告では、厳密に単年度予決算の体裁を作るために入出金の流れを整理したものを提出していたが、今年度より実際の入出金をそのまま報告することとした旨、会計担当幹事より説明があった。

* 収入

項目	収入金額
大会費	32,000
展示料	10,000
懇親会会費	172,000
会費	196,500
入会金	3,000
寄付金	8,000
利子	187
学会誌代	2,000
次年度会費収入分より前借り	190
小計	423,877
2011 年度からの繰越金	562,560
計	986,437

* 支出

項目	支出金額
懇親会費用	164300
大会アルバイト料	10000
本部への学会誌代支払い*	0
事務・雑費・郵便費	28666
学会誌配布費	25380
ホームページ関連費用	11805
ウェブ構築謝礼費	50000
調整金	64138
小計	354289
2013 年度への繰越金	632148
計	986437

*2012 年度分の学会誌代請求書が当該年度内に到着しなかったため、次度分と合わせて後日送金し、次年度の支出として計上する。

(2) 2013 年度予算案提出

続いて 2013 年度予算が報告され会員の承認を受けた。

* 収入

項目	収入金額
懇親会費	160000
大会費	35,000
会費	200,000
入会金	9000
展示料	10000
小計	414000
2012 年度からの繰越金	632148
計	1046148

* 支出

項目	収入金額
懇親会費	160000
大会経費・アルバイト料	10000
本部への学会誌代支	300000

払い	
銀行手数料	2500
事務・雑費・郵便費	40000
ホームページ関連費用	15000
前年度収入への前貸し分	190
小計	527690
2014 年度への繰越金	518458
計	1046148

(3) 規約の改正について

会費納入に使用している振替口座に関して、郵便局より学会本部住所を明確に規定するよう要請があった。このため学会本部の所在地を会計担当幹事の所在地とする旨、規約第 17 条として明記し、併せて役員業務を明文化するよう、規約第 7 条を改正する案が事務局より提出され、会員の承認を受けた。

(4) ウェブサイト管理委員会及びウェブ・コンテンツ編集委員会の立ち上げについて

学会ホームページの運営に関して、ウェブサイト管理委員会とウェブ・コンテンツ編集委員会を設置する旨提案がされ、承認された。前者は担当幹事を小宮真樹子氏とし、後者は委員長を細川支部長が担当する旨、提案され、承認された。

(4) ビュルタン配布形態の変更について

本部発行のビュルタンについて、発行形態の変更（紙媒体の冊子と電子版の 2 形態併用）に伴い、13 年度中に配布形態についてあらためて希望を各会員に尋ねる旨、提案され、承認された。

大会研究発表要旨

①「消極的な求婚者—アイスランドの bridal-quest romance から—」

林邦彦

トリスタン物語に題材を取り、今日アイスランド語の写本で伝わる *Tristrams saga ok Ísöndar* と呼ばれる作品は 1226 年にノルウェー王 Hákon Hákonarson（在位 1217-1263）の命で修道士 Robert によってノルウェー語で書かれたものと考えられている。この作品とは人物やプロットの非常に基本的な内容こそ変わらないが、

分量は大幅に少なく、内容が様々な点で大幅に異なる *Saga af Tristram ok Ísödd* と呼ばれる作品が著されたとされる 14 世紀のアイスランドでは、主としてフランス等の外国文学からの翻案作品の様々なモチーフを用いた独自の騎士物語作品が多数著された。こうしたアイスランド独自の騎士物語作品の一つに *Jarlmanns saga ok Hermanns* と呼ばれる作品がある。伝統的なトリスタン物語では、主君の代理求婚者が結果的に主君を裏切り、本来主君と結ばれるべき求婚相手との間で不倫関係に陥るが、伝統的なトリスタン物語の改変作である *Saga af Tristram ok Ísödd* と、アイスランド独自の騎士物語作品 *Jarlmanns saga ok Hermanns* の間にはともに、上述のタイプの不倫関係に異を唱える点で共通性が見られる。*Jarlmanns saga ok Hermanns* は大きく分けて、A ヴァージョン、B ヴァージョンと呼ぶ二種類の内容のものが伝承されているが、A ヴァージョンでは主人公である代理求婚者 Jarlmann が求婚相手の女性 Rikilat をめぐって主君 Hermann への忠誠心が試される場面が B ヴァージョンよりも多く、Jarlmann にとっては打ち勝つべき問題の難度が高い。一方、求婚を命じた主君については、*Tristrams saga ok Ísöndar* の Markis 王と比べ、*Saga af Tristram ok Ísödd* における Móródd 王（Markis 王にあたる）の Tristram に対する態度は Ísödd を巡る Tristram の望みがより叶いやすくなるものとなっているのに対し、*Jarlmanns saga ok Hermanns* の Hermann は A、B のいずれのヴァージョンにおいても確固たる理由もないまま Jarlmann と Rikilat の仲を疑い、その様は滑稽でさえある。

②「ミンネザングにおけるアーサー王物語—ハルトマンとヴォルフラムのミンネザングの比較を中心に—」

伊藤亮平

本発表では、ドイツ中世宮廷叙事詩人、Hartmann von Aue と Wolfram von Eschenbach のミンネザングを比較し、両者のミンネザングの創作態度とミンネ観の相違を検証した。

両者ともにフランス宮廷叙事詩人 Chrétien de Troyes の作品を典拠に、Hartmann は、*Iwein* と *Erec* を、Wolfram は *Parzival* を残しており、一般的に叙事詩人として知られているが、Hartmann 18 篇、Wolfram 9 篇のミンネザングも手がけている。

両者のリートを比較した場合、均整の取れた文体で倫理性の高い内容を述べる Hartmann と、奇抜な比喻表現を多用する Wolfram という顕著な違いが、叙事詩のみならずミンネザングにも見られる。

なお従来の見解では、Hartmann は「十字軍の歌」(Kreuzlied) において、Wolfram は「ターゲリート」(Tagelied) の KLD 69, IV において、ミンネザングと決別したとされている。

確かに、Hartmann の 3 篇の「十字軍の歌」(MF 209, 25 / MF 211, 20 / MF 218, 5) では、「高きミンネ」が否定され、神への愛が強調されている。しかし MF 218, 5 では、十字軍遠征を鼓舞するために「高きミンネ」で使用される表現が援用されているため、神への愛と現世の愛の境界線が曖昧となり、ミンネザングとの完全な決別とは言い難い側面を見せている。また Wolfram の場合、KLD 69, IV において、夫婦愛の優位性を説く点に関して特異である。しかし、男女の相互愛と二人の別離を解決する手段として夫婦愛を挙げているに過ぎない。その他のターゲリートでは、従来のミンネザングの範疇において愛の成就と官能性を追求しており、それが結果的に「高きミンネ」が持つ矛盾を明確にしている。

双方とも男女の相互愛を描く試みとしてミンネザングに着手しており、この創作態度は、一見ミンネザングとの決別ともとれる Hartmann の「十字軍の歌」や Wolfram の「ターゲリート」の中にも内包されている。そして相互愛を表現するためのリートの種類の選択の相違が、歌人としての両者の気質の違いを浮き彫りにしている。

③「白鹿、ハイタカ、角笛—クレチアン・ド・トロワ『エレックとエニード』における狩猟の言説—

小沼義雄

クレチアン・ド・トロワの『エレックとエニード』は同時代のプランタジネット王朝の王権イデオロギーが色濃く反映された作品であり、フィクションと歴史的現実の交錯が成立年代を確定する鍵となっている。とりわけ大団円で、アーサー王はナントに全諸侯を招集し、壮大な戴冠式でエレックとエニードは王位を継承するが、1169 年のクリスマスにヘンリー二世はナントで宮廷を開催しており、ブルターニュの全諸侯を招集させ、第三王子ジョフロワとその許嫁コンスタンス（ブルターニュ公コナン四世の娘）に臣従を誓わせていた。アーサー王の支配圏はアンジュー帝国のそれと重複し、クレチアンとヘンリー二世の宮廷との関係は不確かなものの、かねてより『エレック』にはヘンリー二世の統治理念との関連が指摘されている。

『エレック』はロイヤルカップルの誕生から王位継承までを描くロマンスだが、作品冒頭の「白鹿狩り」や「ハイタカの試練」のように、エレックとエニードの恋愛の誕生、成長、王位継承へと至る一連のプロセスは「狩猟」にまつわる表象により段階的に彩られている。従来の研究で

は、狩猟のモチーフはケルト起源の神話伝説との関連が想定されてきたが、ヘンリー二世の時代、狩猟はイングランド王の権威を象徴する特権として法的に厳しく規定されていた。王権表象としての狩猟は 1066 年のノルマン征服以降、ノルマン人征服者により大陸から伝えられた外来文化であり、同時代の歴史資料には歴代のノルマン人王による常軌を逸した狩猟熱が記録されている。

本発表では歴史資料と俗語文学を突き合わせることにより、「白鹿狩り」、「ハイタカの試練」、「宮廷の喜び」という三つのエピソードにおいて、ロイヤルカップルが王位継承に相応しい存在になることは「狩人」になることを含意しており、王権表象としての狩猟にはヘンリー二世時代の王権イデオロギーが反映されていることを説明した。

特別講演要旨

「宮沢賢治と中世フランス文学—虚構の問題—

天澤退二郎

中世フランス文学においては、当時の実作者によって《武勳詩は史実を語り、物語文学は虚構を語る》ことが認識されていた。一方その物語作者たちは、「創作」という神のみに許される行為を宗教会議で糾弾される怖れから、しきりに出典を明記したり、「物語の語るところによれば」という成句で非人称性を隠れみのにしながら、自分の語ることは「本当 vrai」であり、「真実 vérité」であることをあえて強調した。この「真実」「本当」とは何か—このことを考えるために、マリ・ド・フランスの『レー』と宮沢賢治の童話「鹿踊りのはじまり」とを突き合わせてみたい。

マリの「すいかずら」の冒頭は《「すいかずら」と人の呼ぶレーの／まことの物語を皆様方にお話しする》という二行ではじまり、「ギジュマール」の第二節は《ブルトン人が作ったレーの／私が真実だと知っている物語を／皆様へ手短かに申し上げる》と切り出される。

一方、宮沢賢治のテキストは、日本の東北地方に今も生きる民間伝承的舞踏「鹿踊り」の、起源を語る説話と見えながら、話者はそう言わずに、これは風が、《鹿踊りのほんたうの精神を語りました》と冒頭に述べる。

この《本当の精神》こそ、マリ・ド・フランスがケルト系の口誦物語の仏語訳によって読者に伝えたかった真実性のあかしだったのではないか。そしてここには中世フランス物語文学と賢治作品とに共通する「虚構」の真相があると考えたい。

II. 2013 年度年次大会のお知らせ

[日時] 2013 年 12 月 14 日 12 時 30 分より

[場所] 慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎
1F シンポジウム・スペース

[プログラム]

第 1 部：研究発表

「フェロー語バラッド *Ívint Herintsson* の伝承」林邦彦（尚美学園大学非常勤講師）

「ゴットフリートの『トリスタン』における愛と身体」渡邊徳明（日本大学）

第 2 部：特別講演

「Peter Field の新版（2013）に至るマロリーの諸版について」高宮利行（慶應義塾大学名誉教授）

第 3 部：シンポジウム

「トールキンと詩の伝統」

司会：高木眞佐子（杏林大学）

「ケルトの ^{うまびと} 唄人 トールキン」辺見葉子（慶應義塾大学）

「トールキンの『アーサー王の死』と頭韻詩の伝統」伊藤壺（信州大学）

「現代詩人トールキン」高橋勇（慶應義塾大学）
支部総会

18 :30 懇親会 於：来往舎 1F ファカルティ・ラウンジ

[大会費] 1,000 円（会員のみ／学生無料）

[懇親会費] 5,000 円（学生 3,000 円）

III. 会計からのお願い

下記のとおり 2014 年度分会費の納入をお願い申し上げます。払込票は先般お送りした支部大会のお知らせに同封いたしました。寄付金についてもこちらの払込票をご利用ください。

〈郵便振替口座番号〉

加入者名：国際アーサー王学会日本支部
口座番号：00250-6-41865

年会費 : 3,000 円

会 計 : 渡邊徳明

なお勝手ながら、会計事務の都合上、本年度より年次大会当日の会場での会費払込は、新年度 1 年分のみの受付とさせていただきます。旧年度以前の未納分は、必ず郵便振替にてご送付下さいますようお願いいたします。

日本支部では、一口 1,000 円からの寄付金を随時募集いたしております。ご寄付を希望される方は、年会費払込票に「寄付〇口」とお書き添えの上、年会費とともにお支払い下さい。また大会会場でのご寄付も受け付けております。皆さまの温かいご支援をお願い申し上げます。

IV. 会員名簿に関するお願い

ご連絡先等の名簿記載事項に変更があった場合は、速やかに事務局までお知らせください。ただし実際に会員に配布される会員名簿に関しては、個人情報保護の観点からそれぞれの事項（所属・住所・電話／ファックス番号・メールアドレス）を掲載中止にすることも可能です。ご希望がございましたら事務局までお申し出ください。

なお、国際学会会誌の *Bibliographical Bulletin* については、名簿記載事項変更の届出が反映されるまでに一年かかります。悪しからずご了承ください。

V. 研究発表・シンポジウム企画募集

日本支部では随時、支部大会での研究発表・シンポジウム企画を募集しております。ご希望・ご提案がございましたら事務局までお寄せください。シンポジウム企画は 7 月末、研究発表は 9 月末 を締切のめどとし、時期に従って当該年度または次年度の大会に組み入れて参ります。

VI. 文献情報

英文学（書誌担当:小宮真樹子）

I 〈研究（単行本）〉

有光秀行『中世ブリテン諸島史研究: ネイション意識の諸相』、刀水書房、2013年。

加藤 哲実『宗教的心性と法—イングランド中世の農村と歳市』、国際書院、2013年。

佐藤伊久男『中世イングランドにおける諸社会の構造と展開』、創文社、2012年。

ジョゼフ・ギース、フランシス・ギース『中世ヨーロッパの家族』（三川基好訳）、講談社、2013年。

□パストン家の書簡を扱う

高宮利行『本の世界はへんな世界』、雄松堂、2012年。

多ヶ谷有子『チョーサー・アーサー・中世浪漫 II』、ほんのしろ、2013年。

玉泉八州男『北のヴィーナス: イギリス中世・ルネサンス文学管見』、研究社、2013年。

西原稔『世界史でたどる名作オペラ』、東京堂出版、2013年。

□ヘンリー・パーセルのオペラ『アーサー王』を扱う

羽染竹一『古英語(アングロ・サクソン語)辞典』（鏡味國彦・齊藤昇編）、文化書房博文社、2013年。

八木雄二『神を哲学した中世: ヨーロッパ精神の源流』、新潮社、2012年。

II 〈研究（雑誌・紀要論文等）〉

石篠憲一「王妃グウィネヴィアの最期—マロリーと二つの原拠—」、『主流』（同志社大学英文学会）、第75号、2013年、pp. 1-23.

石野はるみ「中世の「戦う人」—チョーサーの「騎士の話」より—」、文学と評論社編『文学と戦争—英米文学の視点から—』、英宝社、2013年、pp. 5-17.

伊藤盡「イングランドから北海沿岸文化を訪ねよう: ヴァイキングの歩みとともに(第2回)中世の神話から現代の神話へ: カンプリアの教区教会(2)」、『英語教育』（大修館書店）、第61号(9)、2012年、pp. 2-5.

Hiroki OKAMOTO “‘Hise uten-laddes here comen’: Exploiting the Image of the Dane in *Havelok the Dane*,” *Mythes, Symboles et Images* 1 (2012), 69-84.

菊池肇哉「中世英国コモン・ロー: グランヴィルとブラクトンに於ける契約「カウサ」理論」、『法学紀要』（日本大学）、第54号、2013年、pp. 163-190.

草地伸圭「中世における騎士という存在: 人々の「理想」としてのアーサー王」、『北星学園大学大学院論集』、第4号、2013年、pp. 243-256.

隈元貞広「チョーサーの詩行におけるトーンの醸成: チョーサーの情緒的言語研究試論」、『文学部論叢』（熊本大学）、第104号、2013年、pp. 41-60.

小林美樹「Maloryにおける語順と情報構造: than または there に導かれる文を中心に」、『神田外語大学紀要』、第25号、2013年、pp. 133-156.

Toshiyuki TAKAMIYA “Macbeth and Malory in the 1625 Edition of Peter Heylyn’s *Mircosmos: A Nearly Unfortunate Tale*,” in R. F. YEAGER and Toshiyuki TAKAMIYA (ed.), *The Medieval Python: the Purposive and Provocative Work of Terry Jones*, New York, Palgrave Macmillan, 2012, pp.229-239.

Chiyoko, TANAKA “The Respectable Wizard in Editions of Malory’s *Morte Darthur* in the Nineteenth and Early Twentieth Centuries,” *Tinker Bell*, 50 (2012), 57-69.

林邦彦「消極的な求婚者たち—*Jarlmanns saga ok Hermanns* と *Saga af Tristram ok Ísodd*—」、『人文研紀要』（中央大学人文科学研究所）、第75号、2013年、pp. 309-334.

Yuri, FUWA “A ‘Just War’? A Further Reassessment of the Alliterative *Morte Arthure*,” in Albrecht CLASSEN and Nadia MARGOLIS (ed.), *War and Peace: Critical Issues in European Societies and Literature 800-1800*, Berlin, Walter de Gruyter, 2011, 349-375.

Yuri, FUWA “The Editor at Work: Joseph Haslewood’s Edition of Malory (1816),” *Mythes, Symboles et Images* 1 (2012), 59-68.

Yoko HEMMI “The Marvels of the Forest of Brocéliande in a Colonial Context: Chrétien de Troyes and Wace,” in Koji WATANABE and Fleur VIGNERON (dir.), *Vois des mythes, science des civilisations: Hommage à Philippe Walter*, Bern, Peter Lang, 2012, pp. 179-193.

前野みち子 「美德と悪徳の闘い：中世キリスト教モラルの図像学的研究 (1)」、『言語文化論集』（名古屋大学大学院国際言語文化研究科）、第 34 号(2)、2013 年、pp. 21-42.

Noriko MATSUI “‘Fortune’ in *The Wars of Alexander* and the Alliterative *Morte Arthure* in Social and Cultural Context of Fourteenth-Century England,” *Studies in Medieval English Language and Literature* 24 (2009), 21-31.

III 〈その他〉

アリアナ・フランクリン 『アーサー王の墓所の夢』（吉澤康子訳）、東京創元社、2013 年。

独文学（書誌担当：林邦彦）

I 〈論文（紀要論文等）〉

石井道子 井上ひさしと「グレゴリウス伝説」 早稲田大学創造理工学部社会文化領域人文社会科学研究会 『人文社会科学研究』第 53 号（2013 年 3 月）115-138 頁。

石川栄作 アイルハルト・フォン・オーベルク作『トリストラント』の特質—ゴットフリート作品との比較において— 徳島大学総合科学部 『言語文化研究』第 20 巻（2012 年 12 月）15-53 頁。

伊藤亮平 Reinmar der Alte の「使者の歌」における使者の役割について 日本独文学会中国四国支部 『ドイツ文学論集』第 44 号（2011 年 10 月）5-18 頁。

岩井方男 『ニーベルンゲンの歌』における「宮廷的なもの」(2) 早稲田大学政治経済学部教養諸学研究会 『教養諸学研究』第 132・133 合併号（2012 年 12 月）1-25 頁。

岩井方男 『ニーベルンゲンの歌』における平和 早稲田大学政治経済学部教養諸学研究会 『教養諸学研究』第 132・133 合併号（2012 年 12 月）27-53 頁。

岩井方男 『ニーベルンゲンの歌』における贈与 早稲田大学政治経済学部教養諸学研究会 『教養諸学研究』第 134 号（2013 年 3 月）69-96 頁。

白木和美 Ulrich von Zatzikhoven 作 „Lanzelet“ における Mantelprobe をめぐって 東京都立大学大学院独文研究会 『METROPOLE』第 31 号（2010 年 10 月）1-14 頁。

田中一嘉 ミンネと宮廷的名誉—ゴットフリートの『トリスタン』におけるリヴァリーとブランシェフルールの場合について— 成蹊大学大学院文学研究科 『成蹊人文研究』第 20 号（2012 年 3 月）133-151 頁。

寺田龍男 「リーンハルト・ショイベルの英雄本」に関する諸問題—日本人ゲルマニストの視点から— 北海道大学大学院教育学研究院 『北海道大学大学院教育学研究院紀要』第 118 号（2013 年 6 月）179-193 頁。

浜野明大 古ドイツ語コーパスに関する一考察—その問題点と可能性— 日本大学文理学部人文科学研究所 『研究紀要』第 85 号（2013 年 3 月）13-26 頁。

Jun Yamamoto (山本 潤) Minneritt in recken wise. Interferenzen der höfischen und der heroischen Welt im Nibelungenlied. 首都大学東京都市教養学部人文・社会系、東京都立大学人文学部 『人文学報』第 465 号（2012 年 3 月）17-32 頁。

II 〈翻訳〉

尾野照治 トマジン・フォン・ツェルクレーレ 『異国の客』の「第三の書」—翻訳の試み— 京都大学人間・環境学研究科ドイツ語部会 『ドイツ文学研究』第 58 巻（2013 年 3 月）1-39 頁。

林 邦彦 『王冠』（その四）ハインリヒ・フォン・デム・テュールリーン作 早稲田大学大学院文学研究

仏文学(書誌担当:小沼義雄)

I 〈原典の校訂版、及び日本語訳〉

Edition électronique du Roland d'Oxford, publiée par Hitoshi OGURISU, Wakayama, 2013, 1^{ère} édition.

* 『ロランの歌』(オックスフォード写本)の電子校訂版。小栗栖等先生の個人ホームページからダウンロードが可能。<http://www.eonet.ne.jp/~ogurisu/Jp/Intro.html>

『パリの住人の日記 I: 1405-1418』(堀越孝一訳・校注)、八坂書房、2013年

* 内乱、処刑、裏切り、疫病、諸物値上り…。百年戦争下の殺伐とした世をしたたかに生き抜く人びとの姿と時代の息づかいを鮮やかに伝え、ジャンヌ・ダルクを目撃証言を含むことでも知られる、貴重な史料の全訳(紹介文より)。

『フランス中世文学名作選』(松原秀一、天沢退二郎、原野昇編訳)、白水社、2013年

* 『フランス中世文学集』(新倉俊一、神沢栄三、天沢退二郎訳、白水社、全四巻、1990-1996年)の続巻。本邦初訳となる次の作品を収録する。クレティアン・ド・トロワ『フィロメーナ』(天沢退二郎訳)、『《愛の神》論』(天沢退二郎訳)、トルバドゥール・トルヴェール選集(瀬戸直彦訳)、ヴァース『アーサー王の生涯』(原野昇訳)、ロベール・ド・ボロン『聖杯由来の物語』(横山安由美訳)、ユオン・ド・メリー『反キリストの騎馬試合』(篠田勝英訳)、ジャン・ルナール『ばらの物語』(松原秀一訳)、『アラスのクルトワ』(鈴木覺訳)、アラン・シャルティエ『つれない姫君』(細川哲士訳)、伝ピエール・ド・ボーヴェ『動物誌』(福本直之訳)、リシャール・ド・フルニヴァル『愛の動物誌』(福本直之訳)、マルボード・ド・レンヌ『金石誌』(福本直之訳)。

『フランス民話集 II』(金光仁三郎、福井千春、渡邊浩司、山辺雅彦訳)、中央大学出版部、2013年

* ドーフィネ地方(渡邊浩司訳)、ガスコニュー地方(山辺雅彦訳)、ローヌ地方(金光仁三郎訳)、ブルターニュ地方(福井千春訳)という四地方の民話を厳選し訳出したもの。

II 〈研究書〉

泉美知子『文化遺産としての中世:近代フランスの知・制度・感性に見る過去の保存』、三元社、2013年

木俣元一『ゴシックの視覚宇宙』、名古屋大学出版会、2013年

佐佐木茂美『トリスタン物語:変容するトリスタン像とその「物語」』、中央大学人文科学研究所、2013年(人文研ブックレット⑩)

佐藤彰一『カール大帝:ヨーロッパの父』、山川出版社、2013年(世界史リブレット人)

将基面貴巳『ヨーロッパ政治思想の誕生』、名古屋大学出版会、2013年

田桐正彦『オルレアン公詩歌帖の世界:シャルル・ドルレアンとヴィヨン』、三元社、2013年

* 清新な詩で今日も愛される、フランス15世紀の代表的叙情詩人、シャルル・ドルレアン。百年戦争の最中、若くしてアザンクールの戦いに敗れ、二五年の歳月を捕囚として過ごす。帰国後、相続権を有するミラノ侵攻を試みるが果たせず、長女マリー誕生を機に、再度の侵攻を計画するが断念する。ジャンヌ・ダルクと共に戦いながら、その後「反逆罪」に問われた義理の息子アランソン公ジャンを救うための「大弁論」など、中世末期ヨーロッパを生きた政治家・領主オルレアン公としての姿に光をあて、ヴィヨンも加わった「歌合」を中心に、詩歌帖のテキストの水面下にひそむ「言説の多重構造」を精緻に読み解き、従来の詩人像を描き替えていく(紹介文より)。

竹下節子『戦士ジャンヌ・ダルクの炎上と復活』、白水社、2013年

『フランス国立クリュニー中世美術館蔵:貴婦人と一角獣展』、国立新美術館、2013年

『芸術新潮:特集=《一角獣と貴婦人》に秘められた恋』、2013年5月号

Kôji WATANABE et Fleur VIGNERON (dir), *Voix des mythes, science des civilisations. Hommage à Philippe Walter*,

Bern, Peter Lang, 2012.

* フィリップ・ヴァルテール氏（グルノーブル大学名誉教授）の還暦祝いのために企画された献呈論文集。本書に収録された34編の論考は、1）印欧神話、2）ヨーロッパ中世の神話と文学、3）フォークロアと民間伝承、4）神話批評・神話分析、という4つの分野にまたがる。「アーサー王物語」関連の論考も複数含まれている。

アラン・ド・リベラ『理性と信仰：法王庁のもうひとつの抜け穴』（阿部一智訳）、新評論、2013年

アンヌ・ブルノン『カタリ派：中世ヨーロッパ最大の異端』（池上俊一監修、山田美明訳）、創元社、2013年
（「知の再発見」双書）

グザヴィエ・バラル・イ・アルテ『サンティアゴ・デ・コンポステーラと巡礼の道』（杉崎 泰一郎監修、遠藤 ゆかり訳）、創元社、2013年（「知の再発見」双書）

ジャン=ポール・ブリゲリ『モン・サン・ミシェル：奇跡の巡礼地』（池上俊一監修、岩澤雅利訳）、創元社、2013年（「知の再発見」双書）

III 〈研究論文〉

小川直之「中世シリア・パレスチナ、キプロス、ペロポネソスのフランス文学：十字軍国家における文学活動」、『亜細亜大学学術文化紀要』、21号、2012年、pp.21-42.

小沼義雄「ロヴェルとマランの密猟：『ギヨーム・ダングルテール』における王権表象としての狩猟」、『関東支部論集』（日本フランス語フランス文学会）、21号、2012年、pp.1-15.

佐佐木茂美「国際アーサー王学会を語る」、『流域』、72号、2013年、pp.30-36.

瀬戸直彦『『秘中の秘』覚え書き：その養生術(中世オック語版)について』、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』、第2分冊、58号、2013年、pp.35-56.

高名康文「フランスのコレージュ教科書と中世文学：『狐物語』の学習によるジャンル概念の形成」、『成城文藝』（成城大学文芸学部）、221号、2012年、pp.116-134.

徳井淑子「衣服とファッション」、堀越宏一・甚野尚志編『15のテーマで学ぶ中世ヨーロッパ史』、ミネルヴァ書房、2012年、pp.207-229.

田辺めぐみ「祈りの文脈：カトリーヌ・ド・ローアンとフランソワーズ・ド・ディナンの時禱書」、『ステラ』（九州大学フランス語フランス文学研究会）、31号、2012年、pp.147-161.

細川哲士「ある使命を帯びた詩の話：イングランド王リチャード一世のシルヴェンテス」、『現代文学』、86号、2013年、pp.20-29.

—「噂の三人：ラブレー、ベルヴァル、オリヴィエ・ド・セール」、『現代文学』、87号、2013年、pp.67-74.

渡邊浩司『『ランスロ本伝』の「苦しみの砦」エピソードをめぐる考察』、『仏語仏文学研究』（中央大学仏語仏文学研究会）、45号、2013年、pp.1-33.

—「現世を離れる直前に＜熊＞に戻ったアーサー王：中世フランス語散文『アーサー王の死』が描く酒倉長リュカンの圧死をめぐる」、『ユリイカ：特集=クマ』、2013年9月号、pp.177-188.

— « Le séjour dans l'Autre Monde et la durée miraculeuse du temps : essai de rapprochement entre le *Lai de Guingamor* et la légende d'Urashima », in Kôji WATANABE et Fleur VIGNERON (dir), *Voix des mythes, science des civilisations. Hommage à Philippe Walter*, Bern, Peter Lang, 2012, pp.43-55.

IV 〈書評〉

瀬戸直彦「ジョルジュ・ペゲー『現代版フラメンカ物語』（谷口伊兵衛訳）、而立書房、2012年」、『図書新聞』、3100号、2013年3月2日

編集・発行

国際アーサー王学会日本支部事務局
6078194 京都市山科区大宅栈敷 2-123
嶋崎陽一

Tel. & Fax. : 075-591-7471

E-mail : shimazaki@me.com

メーリング・リスト :

members@ml.arthuriana.jp

(新規登録・アドレス変更は事務局まで)

学会ウェブサイト :

<http://www.arthuriana.jp/index.php>